

### 3-4 結果

食物項目分析の結果、双子葉植物、種子、果実、堅果類、動物質、根・塊茎の占有率(平均値)には調査期間中(9~4月)季節的に変化が認められ(Kruskal-Wallis検定、動物質は $p < 0.05$ 、その他は $p < 0.01$ )、各食物項目の利用量はそれぞれ異なる時期にピークを示した。

種子と果実の占有率は、9月に最も高くなったが(それぞれ21.2, 11.8%)、その後減少し、それぞれ0.1~5.0%, 0~2.0%とほとんど利用されなくなった(図3a, b)。9月に出現した種子のほとんどはイネであった。その他にナシ、カキ、キイチゴ属(*Rubus* spp.)、マメ科、イネ科、カヤツリグサ科、タデ科の種子が確認された。果実はカキの果肉がほとんどで、それ以外は識別できなかった。双子葉植物の占有率は9, 10月にはそれぞれ36.7%, 35.9%と高かったが、その後減少し、2, 4月にはそれぞれ1.9%, 1.6%となった(図3c)。双子葉植物では葉と茎が出現したが、同定できたのはマメ科植物の葉のみであった。堅果類と動物質の占有率は9月にはそれぞれ0.9%, 1.6%であり、ほとんど利用されていなかったが、10月になるとそれぞれ26.3%, 10.1%と高くなり、11月においても25.3%, 9.1%と高かった。その後、これらの占有率は減少し、それぞれ0.1~4.8%, 0.4~2.3%とほとんど利用されなくなった(図3d, e)。堅果類では樹種の識別はできなかった。動物質の出現種としては、アマガエル(*Hyla arborea japonica*)とアオガエル科のカエル(*Rhacophorus* spp.)

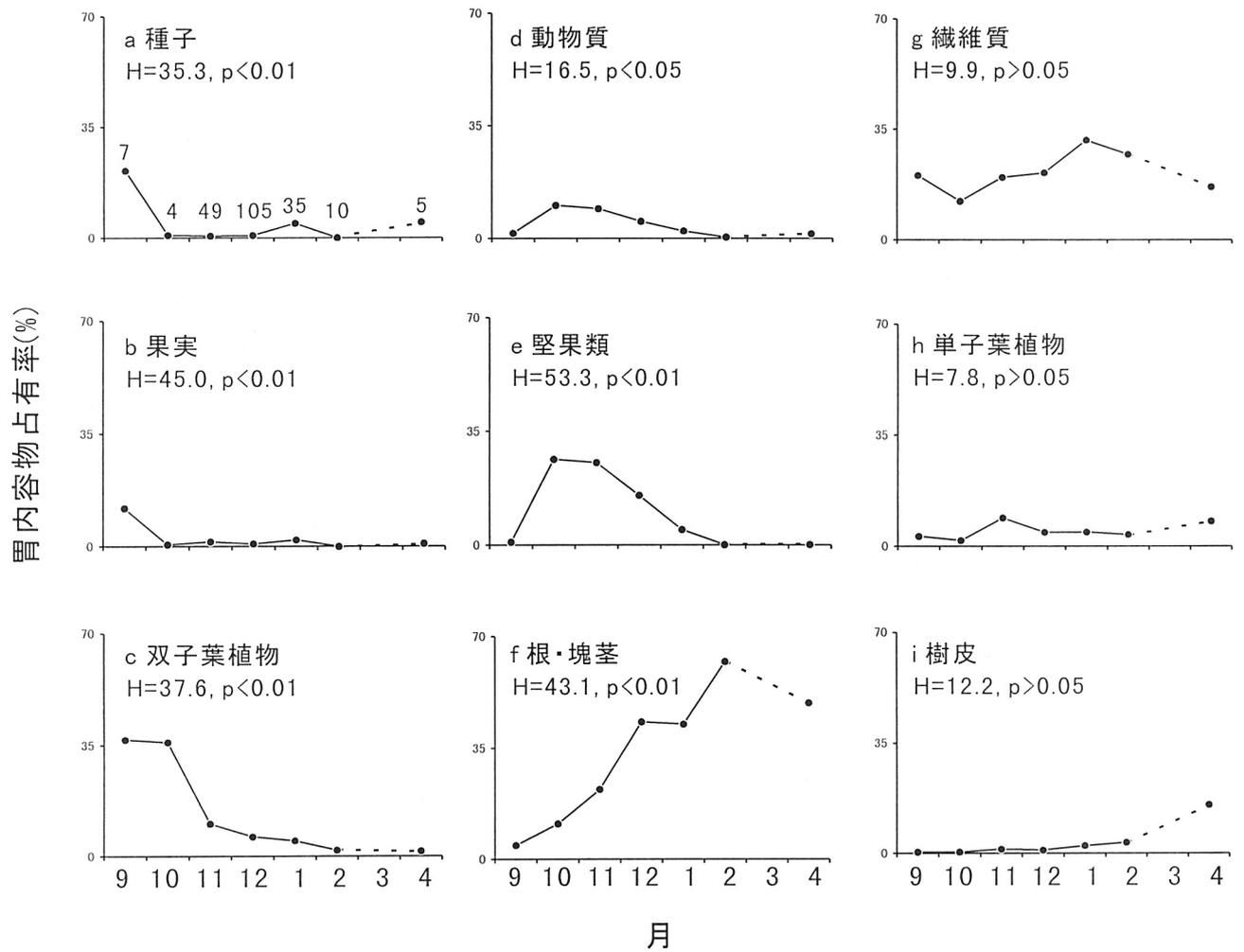


図3. 島根県石見地方におけるニホンイノシシの胃内容物占有率(平均値%)の季節的变化(1994年9月~1995年4月)。「H」はKruskal-Wallisの統計量, サンプル数は図a中の数字で示す。

が多く見られた。その他はミミズ、ムカデ、昆虫、甲虫の幼虫、ダニ、軟体動物、哺乳類、鳥類が認められた。

占有率のピークが最も遅く現れたのは根・塊茎であった(図3f)。根・塊茎の占有率は9月には4.4%と低かったが、その後徐々に増加し、2月に62.2%となった後、4月には49.2%へと減少した。根・塊茎で識別できたのはタケノコのみであった。

繊維質、単子葉植物、樹皮の占有率に季節的変化が認められず(Kruskal-Wallis検定,  $p > 0.05$ )、それぞれ12.1~31.5%、1.8~8.9%、0.4~15.4%を示した(図3g~i)。単子葉植物はイネ(*Oryza sativa*)の茎、ササの葉を確認した。樹皮の種類は同定はできなかった。繊維質が出現したサンプルからは同時に単子葉植物や双子葉植物、根・塊茎も多く出現していたため、繊維質はこれらが噛み砕かれたものと考えられた。

胃内容物中の%CF(平均値)には季節的変化が認められた(Kruskal-Wallis検定,  $p < 0.05$ )。9月から10月にかけて9.0%から17.7%に増加したが、11月以降は減少して2月には5.3%となった(図4a)。その後4月には8.2%と再び増加した。

胃内容物中の%CPにも季節的変化が認められた(Kruskal-Wallis検定,  $p < 0.01$ )。9月の14.9%から僅かに減少し10月は13.6%となったが、11月に増加し最大値18.2%を示した(図4b)。その後再び減少し、2月には7.8%となり、4月には再び増加して12.6%を示した。

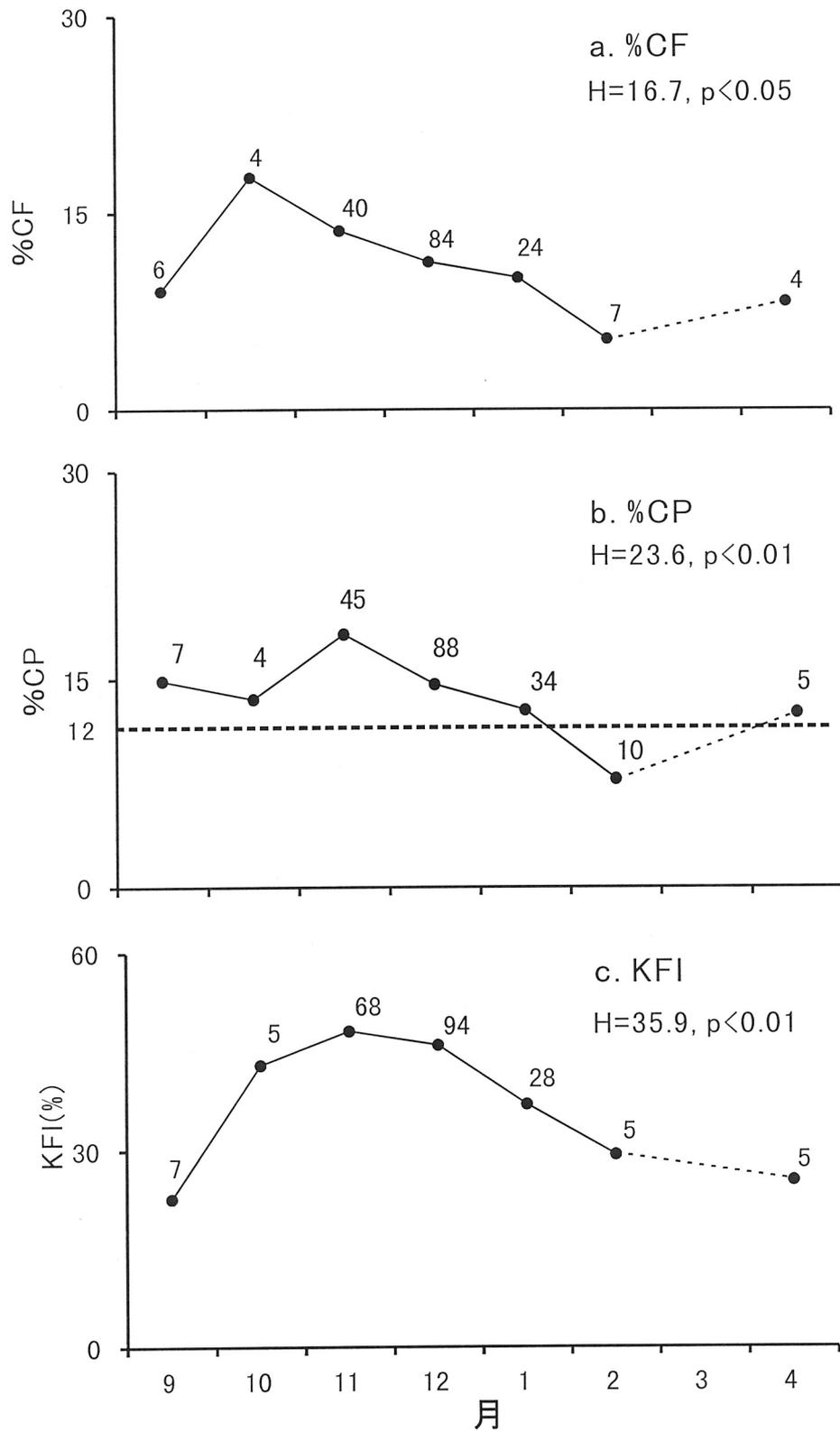


図4. 島根県石見地方におけるイノシシの胃内容物の粗脂肪含有率(%CF), 粗蛋白含有率(%CP)および腎脂肪指数(KFI)の季節的变化(1994年9月~1995年4月)。●は平均値, 数字は試料数, 「H」はKruskal-Wallisの統計量, 図bの破線は%CPの低下による脂肪の消化吸收阻害が生じない最低水準(National Research Council, 1979)を示す。

調査個体群のKFIにも季節的変化が見られ(Kruskal-Wallis検定,  $p < 0.01$ ), 9月の22.6%から11月の48.2%まで増加したが, その後減少し4月には25.3%となった(図4c).